

第3期大和市多文化共生会議 第11回会議録(要約)

日時: 2014年3月8日(土)14:00~16:00

場所: 大和市役所分庁舎2階会議室

出席: 委員(新井政則、石間フロレリサ、伊藤裕子、稲福スーザン、岡崎チャーメイ、菊池健一、小林ホルヘ、宮嶋耕治) / ファシリテーター 清水睦美 / 大和市国際・男女共同参画課(船越英一) / 公益財団法人大和市国際化協会(田中弘子、小西永里子、石川和友) 以上13名

欠席: 委員(伊藤素美、ファン チィ フォン、山田静娥)(敬称略)

1 これまでフィールドワークについて

ファシリテーターから以下の通りまとめてもらった。

- この会議はネットワークづくりをテーマに進めてきた。災害が起きたときに助け合っているために日本人や外国人を含めたネットワークをつくっていくことが重要ではないかという考えからスタートした。
- 大和で災害があったときに、多くの人たちが犠牲にならずに、悪い状態から良い状態にしていけることについて、外国人を対象にしながら考えたい。
- これまでのフィールドワークでは各団体で災害時にどのように対応していけるのかについて話を聞いてきた。
- 今後の予定として、外国人支援をテーマにした防災訓練をやってみようと考えている。重要なのは、訓練のときにそれぞれがどんな役割があるのか、はっきりさせておくこと。
- そのためには事前説明が必要。訓練の内容は災害が起きたときに実際にやることよりもずっと小さくなるが、その内容を決めていかななくてはならない。
- 「2段構え」で考えてみる。まず、①本当に災害が起きたときに各団体にやってもらいたいことをイメージすること、次に②訓練のときにやってもらいたいこと、の2つ。
- 訓練の良さは、小さな内容だったとしても、実際に災害が起きたときには、その訓練が生きてくること。多言語支援センターを立ち上げて訓練すると、どういうことが見えるのか、訓練をして初めてわかることがある。
- 多言語支援センターで、どのグループに何ををお願いするかまでは、まだ決まっていない。残り一年で、多言語支援センターを設置する訓練を各団体と連携してやることを目標。

これからの会議の方向について

- 委員(日本): 大和市や地域の防災訓練に参加するのは賛成だ。ただし、そのほかに、これまで話し合ってきた外国人の避難所のこと、外国人への情報提供の方法などに、会議の中で意見をまとめておく必要があるのではないか。
- ファシリ: 本日、事務局からは、地域防災訓練と市役所が行う総合防災訓練の2つの訓練の参加が提案されているが、この日程では難しいと考えている。そうした訓練の前に、この会議の委員を中心として防災訓練の案をつくり、災害多言語支援センター立ち上げのシミュレーションを一度やってみる必要があるように思う。
- 委員(日本): 防災訓練だけでなく、もっといろいろやってみたい。
- ファシリ: ベトナム親善協会は事務局がないとのことだった。災害のときには多言語支援センターが活動場所を確保する必要が出てくるかもしれない。ラオス協会は愛川町に拠点があるので、自宅に住めない人などはその拠点に行くことが可能だ。どの国の人たちがどのような支援を必要としているのか、フィールドワークを行った成果を生かしながら、訓練内容を考えていく。
- 委員(日本): 今までフィールドワークでやってきたことをきちんとまとめて、そこでわかったことを防災訓練に生かしていきたい。
- 事務局: 今回は行政への提言よりも、災害が起きた時に機能するようなネットワークづくりをメインに考えている。
- 委員(日本): 防災訓練で学ぶことはたくさんある。それとは別に、会議で話し合った基本的な内容に関して、提言として出しておきたい。
- 委員(フィリピン): わたしたち委員の意見も取り入れてほしい。
- ファシリ: 防災訓練をやる前に、ミニ版の災害多言語支援センターの訓練を行い、事前に委員の中でそのイメージづくりができる日程を組む必要がある。
- 事務局: 4月から5月に組み込んでいくのはどうか。
- 委員(日本): ①多言語支援センターのほかに、②外国人のための避難所をつくるのか、③情報提供はどうするのか、少なくともその3点については、訓練をやる前に会議で確認しておきたい。
- 委員(フィリピン): 一度シミュレーション(訓練)をして勉強してから、意見をまとめておく方がいいと思うので会議日程の後半に意見をまとめたらどうか。
- ファシリ: 多言語支援センターの訓練を行うにあたって、一度、意見を整理してまとめておき、訓練を終えた後にもう一度反省を含めてまとめていく方向でどうか。

○委員(日本):訓練を行う前に意見を集約し、訓練で出た反省を生かして、最後の報告書につなげていく。

総合防災訓練とは？

○事務局:ただし、市の総合防災訓練では、この会議でやりたいと思っている多言語支援センターの訓練を実施するのは難しいかもしれない。

○ファシリ:しかし、総合防災訓練で想定される枠を超えた内容の訓練をしておかないと、できることとできないことの区別ができないのではないかと。次の2案が考えられる。①

先に多言語支援センターの訓練をして、総合防災訓練でもできる範囲で実施する。

②総合防災訓練には一市民として参加して、その体験を基にもう一度自分たちの訓練内容を見直す。

○大和市:総合防災訓練は、小中学校の一つを会場に、全般的なデモンストレーションを行っている。昨年から外国人支援のためのテント一張りを設けている。総合防災訓練では外国人向けの訓練で何ができるのか、アピールする場になってくる。

○ファシリ:そのテントは、実際に災害が起きたときの多言語支援センターが立ち上がる場所というイメージか？

○大和市:そうではなく、訓練のためのブース、スペースという位置づけ。

○ファシリ:デモンストレーションをするときの観客は誰になるのか。

○事務局:われわれが集客する必要がある。

○ファシリ:すると、総合防災訓練はある位置づけを持って取り組まなくてもよいかもしれない。

地域防災訓練とは？

○委員(日本):総合防災訓練のことはわかった。地域の防災訓練について教えてほしい。

○事務局:地域の防災訓練は、それぞれの自治会(自主防災会、避難所運営委員会)が企画して、実施している。

○ファシリ:この会議が企画する防災訓練を、地域で行う防災訓練と一緒にできればと考えている。しかし、市役所としては、外国人だけのための防災訓練を地域防災訓練に単純に組み込むことに難色を示しているようだ。その前に、支援者だけで多言語支援センターを立ち上げる訓練を一度やってみる必要がある。できれば、夏前にやることができればいいかと思う。

- 委員(日本): ひょっとしたら、地域の防災訓練にうまく入り込めないかもしれない。その場合も考えて、自分たちだけで訓練するという手もある。一つでもいいから、メールで情報を流してみるとか、委員でもできるような、身になるような訓練にできるとよい。そうすると問題点がよくわかる。
- 委員(フィリピン): 私の防災訓練のイメージは、日本人も外国人も一緒に参加するというものだが、それは違うのか。
- 委員(日本): そのように実現できれば言うことなし。
- ファシリ: 実際に災害が起きた時には対応することがたくさんある。訓練では、そのうちのいくつかをまとめて規模を小さくして行う。自治会長の力量や考え方、地域住民の協力体制などは地域ごとに違うため、訓練がうまくできるのかわからない。
- 委員(フィリピン): 私たちが知り合いの外国人を呼ぶのはどうか。
- ファシリ: 勝手にやると後であつれきを生んでしまうかもしれないので難しいところ。

どのように防災訓練を行うか？

- 委員(日本): 地域でやる場合、自治会が中心になる。総合防災訓練は大和市が主催なので、市内全域にスピーカーを使って広く呼びかけも行われる。総合防災訓練を利用すれば、アピールできる場になるのではないかと。確かにイベントの色が強いが、これを目標に案を練っていくのはいいことだと思う。
- 委員(ペルー): 分庁舎周辺では防災訓練はやっていないのか。
- 事務局: 自治会(自主防災会)単位では行われていると思うが、大和小の避難所運営委員会はまだ組織化されていないようだ。今のところ市内では33か所のうち、15か所で避難所運営委員会ができています。
- 事務局: 避難所運営委員会にとって、せっかく地域防災訓練を実施するのに、外国人のためだけの訓練になってしまうのは物足りないようだ。地域防災訓練には市役所も協力してもらい、できる範囲の中で多言語支援センターの訓練も同時に行っていきたい。内容は避難所の巡回、翻訳の整理作業などがあるかと思う。ほかにも名簿班の立ち上げなども考えられるが、訓練の大枠は市役所の担当者が作成する。
- ファシリ: 市の総合防災訓練をうまく利用するにしても、地域の防災訓練に参加するにしても、その手前の段階で、われわれ支援者だけで多言語支援センターを立ち上げる訓練をやって、誰がどういう役割を担当するのか、イメージを作っておく必要がある。例えば、翻訳をやるにしても、私たち委員の間ではその共通理解もまだない。もう少し具体的に災害が起きた時のスケジュール表を作成する必要がある。まだ「わたし何

するの？」という状態になっている。電話番をするのか、避難所につけけるのか、支援者とボランティア団体を巻き込むくらいのイメージの訓練案を作っておかないといけない。すると、3回の防災訓練(①自分たちでミニ防災訓練を実施、②大和市が行う総合防災訓練に参加、③地域で行う防災訓練に参加)ができるはず。

訓練を行う前に何をすべきか

- 委員(ペルー): 防災訓練といっても、「避難所の訓練」はやったことがないように思う。避難所を立ち上げるにしても、自分は何をすればいいの、と思う人が多いはず。
- 大和市: 京都の多言語支援センター設置訓練に参加したことがある。支援者の日本人と外国人が集まった。翻訳したものを掲示したり、外国人のところに(避難所)巡回して、どんな状況なのか聞き取りを行った。
- 委員(日本): 8月30日の総合防災訓練に間に合うかわからないが、概略だけでもいいので多言語支援センターの立ち上げや情報提供のやり方などをまとめてみて、一度総合防災訓練でやってみるのはどうか。
- ファシリ: 訓練を行うにあたり、時間軸に沿ったプログラムが必要になってくる。その前に、誰がどんな役割を果たすのか、明確にしないといけない。
- 委員(日本): 多言語支援センターがやらなければいけないことを列挙して、試してみることが必要。
- 委員(日本): 実際には絵にして、見えるようにしないといけない。私たちは経験がないので、イメージを作って、それをみんなで共通の認識にする必要がある。
- ファシリ: もちろん、見える化した方がよい。
- 事務局: 訓練内容を箇条書きで挙げていったらどうか。
- 委員(日本): 訓練をする前に、多言語支援センターがどういうことをやるべきかを整理しないといけない。そうしないとスケジュールを作ることができない。
- ファシリ: 実際に災害が起きた時の流れを作る必要がある。
- 委員(日本): 時間の縦軸と、状況設定(交通網の寸断、道路状況など)を書き出した図を用意したらどうか。避難所を巡回するのも簡単ではないので、地図上に避難所がおちているようなものもあるとよい。
- 委員(フィリピン): 大和市役所では、地震が起きた時にはどういう対応をするか?
- 大和市: 災害が起きたとき、市職員が何をやるのかなど初動のことは決まっている。
- ファシリ: 今、災害が起きたら、市職員は何をやるのか?
- 大和市: 私の場合、まず国際化協会の状況を確認する。それから災害対策本部の

情報を受け取るなど現状の把握を続ける。

- ファシリ: 災害が起きたとき、「外国人への支援をしたいけれど、自分が何をしたらいいのか、わからない」という可能性も考えられる。
- 委員(日本): 災害の初期状態で何をすべきか、確認が必要。
- 大和市: まずは状況の確認が必要。その後、自分の場合だと外国人への情報提供はどうするか、という流れになる。
- ファシリ: 災害が起きたときに、まず、国際化協会に連絡(安否連絡)を入れるなど、実際の流れに沿ったタイムテーブルを作成する必要がある。その案を基に、一度この会議で話し合ってみる。
- 委員(日本): おそらく、市役所では災害が起きた場合の対応策を作っていると思う。それをベースにこれまでのフィールドワークの内容を盛り込んだものを作ることができないものだろうか。

多言語支援センターが何なのかわからない

- 委員(フィリピン): 私は多言語支援センターがどういうものかちょっとイメージできない。多言語支援センターの役割はいくつもあるけれど、本当にできるのかどうかかわからない。訓練は大事だと思うが、多言語支援センターの存在を外国人に周知する必要があると思う。フィールドワークをして思ったことは、各団体にはそれぞれのやり方があって、支援はいらないのではないかということ。在日本ラオス協会にしても、きちんとした連絡の体制が整っている。私たちがまだ何もできていない。
- 委員(日本): 災害が起きると、外国人は日本人よりも受け取れる情報が少なくなる。日本人と同じレベルの情報を受け取ることができる状況にしないとイケない。そのため何をしないとイケないのか明確にしたい。
- 委員(フィリピン): 外国人は多言語支援センターの中身がわかっていない人が多い。災害の時は、通訳や翻訳だけでなく、やることがたくさん出てくる。
- 委員(日本): 自分が住んでいる町田市の地域でも外国人が増えてきている。大和市は地域をこえた連携はどうなっているのか。
- 大和市: 避難してくる人を地域で受け入れていくことが必要になってくる。災害時には、県外からたくさんの支援者が入ってくると思うが、その受け入れをどうやるのか、具体化できていない。時間的なプランを立てて、必要な作業を確認していくことが必要。
- 事務局: 今後は、①私たちが行う多言語支援センターの訓練、②大和市が行う総合防災訓練、③地域で行う防災訓練、この3つの防災訓練を実施していく。

○委員(日本): 先日の広報やまとに避難先のことが掲載されていた。大和市の防災マップがあると避難場所を確認できるので良いと思う。

○委員(フィリピン): 多言語支援センターは(災害が起きる前から)避難場所について、情報を提供していかなくてはいけないのか?

○ファシリ: 災害が起きた時に緊急にやるべき仕事と、国際化協会が日常から災害に関する情報を流す仕事は、別なのもかもしれない。多言語支援センターは災害が起きたときに立ち上がるもの。多言語支援センターの存在は国際化協会が日常的に外国人に対して広報していくべきだろう。訓練をすることで、日常的にどのような情報を流す必要が出てくるのか、より一層ははっきりしてくる。「外国人は多言語支援センターのことを知らない」という話があったが、できるかどうか、まだ練習もしていないので、まずは練習してから、ということだろう。

2 多文化ネットワークについて

事務局から多文化ネットワークについて説明し、次のような意見があった。

○外国料理店のほかに(カンボジア)食材店もある。

○外国人団体のひとつに「すたんどばいみー」も入る。

○フィリピンだけに特化したグループはない。

○小中学校の国際教室については、今のところネットワークには入らない。

3 福島県外国人アンケートとやまとeモニター

次回会議の冒頭に紹介することになった。

4 神奈川県が多言語支援センターの設置訓練

神奈川県国際課と(公財)かながわ国際交流財団による多言語支援センターの設置訓練について、紹介があった。

5 委員長について

紺野委員長が辞退したことに伴い、代わりに岡崎委員が委員長に選出された。

※次回の会議は 4月19日(土)14:00～、次々回は 5月31日(土)14:00～に開催することに決定した。